

浜松城と二俣城の天守台

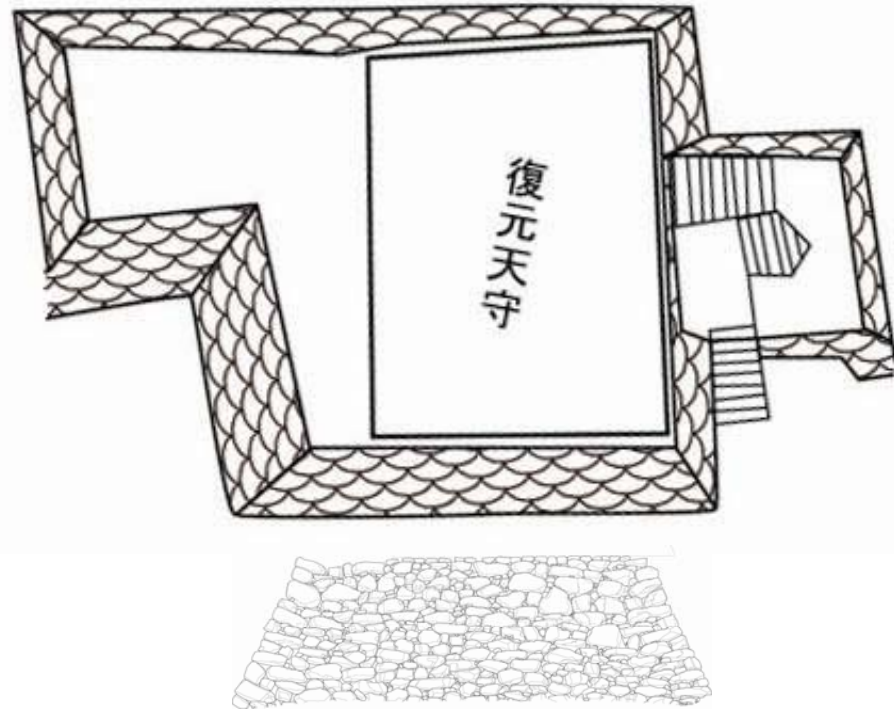
浜松城と二俣城には、ともに野面積みの石垣で築かれた天守台が存在します。天守台の石の積み方や使用している石材は、互いに共通しており、同一の工人集団により構築されたと推定されます。

天守台の大きさを比較すると、幅は浜松城が南面した部分の上端で14.1m、下端で19.1m、二俣城が南面した部分の上端で11.2m、下端で13.8mあります。高さは、現状の地表面から浜松城が5.7m、二俣城が4.0mと幅、高さともに浜松城の天守台のほうがひと回り大きいことがわかります。

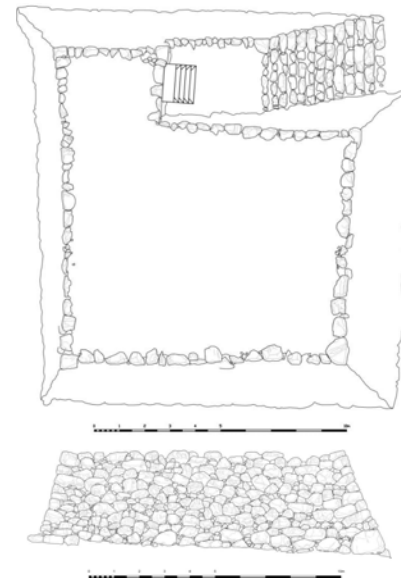
浜松城、二俣城ともに天守閣について絵図等が残されておらず、どのような構造の建物であったのか明らかになっていません。二俣城の天守台の上面には、建物の柱を支えた礎石などが確認できないことから、この部分の構造解明が今後の調査の課題と言えます。

同一縮尺(1/300)で比較した浜松城と二俣城の天守台

浜松城跡



二俣城跡



二俣城跡の発掘調査箇所



天守台北東基礎



本丸中仕切門跡



二の丸東側土塁

今回の発掘調査成果

今回の調査では、天守台西面、本丸土塁、二の丸南側堀切の3箇所を対象に発掘を行っています。天守台西面の調査では、天守台の下端が現在の地表面より下に埋没していることを確認しました。また、天守台の北西隅は新しい時代の積みなおしであることが明らかになりました。本丸土塁の調査では、本丸中仕切門の所から連続して外側まで石垣が巡っていることが明らかになりました。現在は大きく崩れていますが、かつては土塁全体が高い石垣で覆われていたと推定されます。二の丸南側堀切の調査では、現在の地表面から1.6mの深さで底面を確認しました。堀底面の形状は平坦で堀底を通路として利用していたと考えられます。また、2010年に同じ堀の中から出土した土器をその後分析したところ、文禄年間(1592~1596年)頃のものだと判明し、二俣城が堀尾氏領有期に改修されたことが裏付けられました。



天守台西面石垣の基礎



二の丸南側堀切の調査



発掘した堀底



本丸土塁の石垣



安土桃山時代の土器

二俣城は、天竜川と旧二俣川で三方を囲まれた天然の要害の地にあります。丘陵の上に階段状の曲輪が設けられ、主要な施設が連なります。城の中心である本丸や二の丸には、土塁や石垣がめぐらされ、本丸の最奥には、天守台がみられます。

城郭の基本的な姿は今川氏や徳川氏によって形づくられたとみられますが、石垣や天守は、豊臣方の勢力下にある堀尾氏の領有時代(1590~1600年)に築かれたものと考えられます。

二俣城の発掘調査は2009年から継続して行われており、今回が4回目の調査になります。